

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

河村吉行

1 はじめに

山口大学のキャンパスは山口県のほぼ中央部に位置する山口市、その山口市と吉敷郡小郡町、阿知須町を挟んで南西に位置する宇部市、および県の南東部に位置する光市の3市に分散している。山口市内には本部・人文学部・経済学部・教育学部・理学部・農学部の各学部および教育学部附属養護学校で構成される吉田構内(山口市大字吉田1677-1所在)と吉田構内の北約3kmに位置し、教育学部附属幼稚園・山口小学校・同中学校の敷地である亀山構内(山口市白石3丁目1-1・2、同1丁目9-1所在)が存在する。宇部市には医学部・同附属病院、医療技術短期大学部で構成される小串構内(宇部市大字小串1144所在)と小串構内の東約2kmに位置し、工学部および同職員宿舍の占地する常盤構内(宇部市常盤台2557所在)を擁する。また、光市には教育学部附属光小学校・同中学校の敷地である光構内(光市室積浦1-1所在)が存在する。

以上のように、山口大学構内遺跡は吉田・亀山・小串・常盤・光の各構内に埋存する個々の遺跡の総称である。なお、この他にも職員宿舍などの関連諸施設においても調査を実施しており、将来的に新たな遺跡が発見された場合、山口大学構内遺跡として包括する予定である。

本稿では、山口大学構内遺跡の調査の経過、現段階までに蓄積された個々の構内の調査¹⁾成果および遺跡の分布状況、また、残された課題などについてまとめることを目的とする。

2 山口大学構内遺跡の調査の経過

山口大学は昭和41年1月、総合大学としての整備、発展を最大要因として下関市長府に所在する農学部、旧山口市街地に所在する本部・文理学部・経済学部・教育学部を施設統合し、現在の吉田の地へ統合移転工事を開始した。吉田構内では昭和20年代から遺物の散布が知られており、早くから遺跡の存在が予想されていた。その事実が明白となったのはまさに統合移転工事の着手された昭和41年のことで、構内の造成中に遺物が出土し、「吉田遺跡」として周知されたのであった。これが契機となって吉田構内の埋蔵文化財の調査・研究が開始され、文化庁の前身である文化財保護委員会の提言および大学の要請に基づき、早速、教育学部小野忠熈氏は構内に埋存する遺跡の性格の把握や範囲確認のための調査を

実施した。翌昭和42年7月には学長を団長に、小野氏を中心とした学内外の関連分野の専門家によって「山口大学吉田遺跡調査団」が組織され、統合移転に伴う埋蔵文化財の調査が組織的に実施されるに至った。

統合移転当初計画された諸施設の整備が完了する昭和48年まで、山口大学吉田遺跡調査団は精力的に調査を行い、統合移転の円滑な推進に寄与したことはいうまでもない。また、構内の南西部に分布する竪穴住居跡群を弥生時代から古墳時代の集落のモデルケースとして現状保存し、遺跡の保存と活用を積極的に指向した。昭和53年には埋蔵文化財資料館が設立され、吉田構内の整備に対応した埋蔵文化財の調査・研究を継続的に行っている。昭和58年度以降は各構内での調査も開始し、亀山、小串両構内のように新たに遺跡として周知されるに至った構内も存在する。

3 各構内の埋蔵文化財の分布状況

吉田構内

1 立地

吉田構内の総面積は約71万5千²⁾m²で、南北約12km、東西最深部約4kmの紡錘形に開く山口盆地の南東縁辺部に位置する。山口盆地は構造線に沿った中国山地の隆起に伴う断層作用によって生じた盆地で、周辺の山塊からの河川の流入による土砂の排出作用によって広く埋積が行われ県下最大の盆地平野を形成している。吉田構内の地形については、先に河野通弘・高橋英太郎両氏の指摘³⁾があり、ボーリングデータに基づき構内の地形を上下2段の洪積段丘とその下位に広がる榎野川の侵食によって形成された沖積低地との大きく2地形に区分している。洪積段丘は標高約17~20mの下位の段丘面を閩面、標高約25~30mの上位の段丘面を馬木面⁴⁾と呼称している。構内の北東には標高約200mの姫山、南東から南にかけては標高約285mの今山、標高約380mの高倉山などの山地が存在し、構内の東部はこれらの山塊から西および北へ派生する洪積段丘、西部は沖積低地に立地する。

ここでは遺跡の立地、集落の展開を検討するうえでの基礎作業として、地質学的な見地に加え、これまで行った調査の所見をもとに微視的に吉田構内の旧地形の復原を試みる。その手段として、埋蔵文化財の調査によって遺物包含層あるいは地山(基盤)が検出できた数地点について、本学構内を東-西、北-南に分断する土層断面ラインを設定して考えてみることにする。

まず、構内北部のA-A'ライン。最高所に位置するのは姫山の南麓斜面の北から南へ延びる標高約25mの洪積段丘上に立地する第二学生食堂(㊤地点⁴⁾)付近である。同段丘は低い

吉田構内（立地）

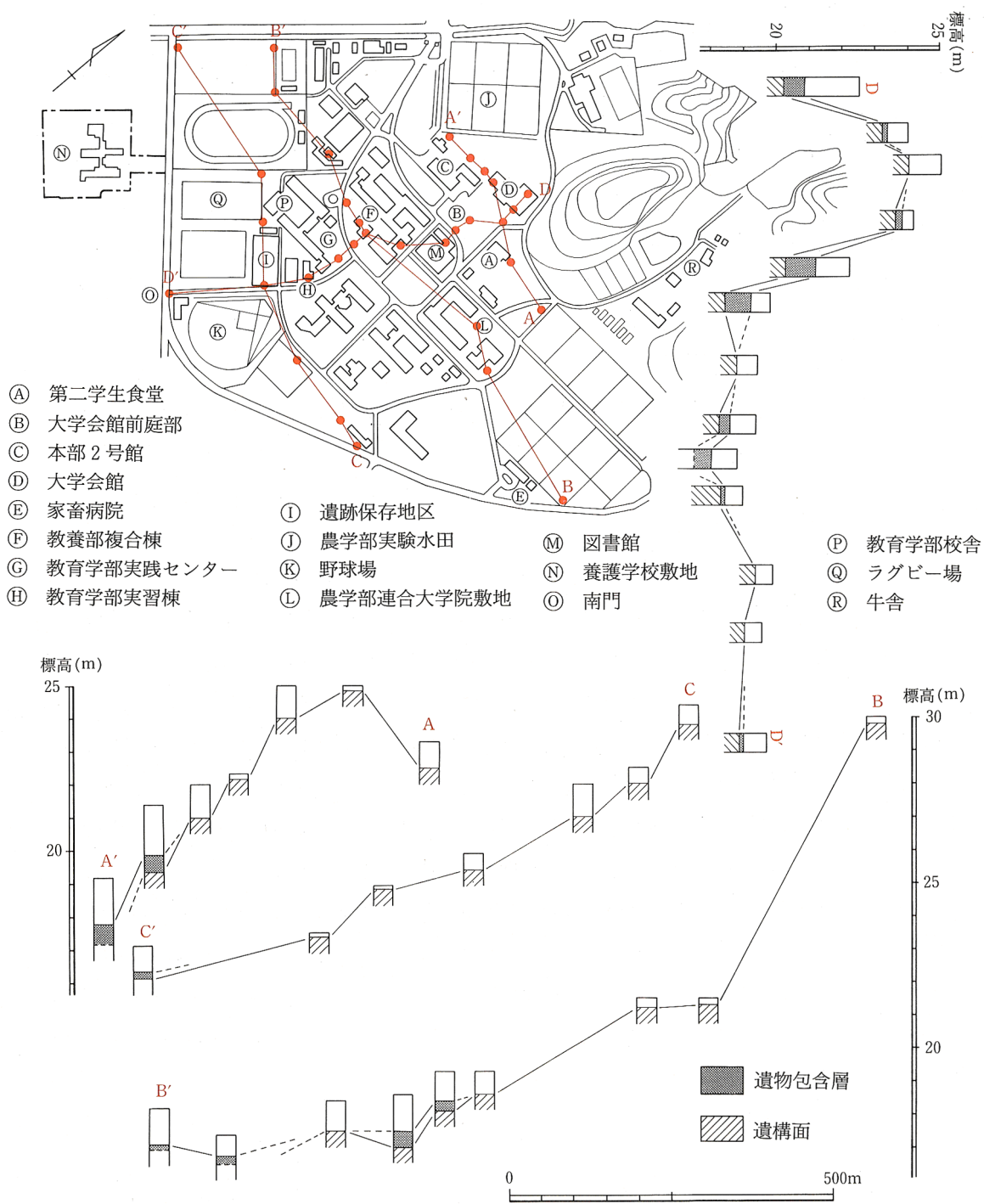


Fig. 80 吉田構内の土層断面柱状図

丘陵状をなし、その西側に所在する大学会館前庭部（㊸地点）から本部2号館（㊹地点）付近まで裾野を延ばしている。地山の落ち込みは大学会館（㊸地点）北端部、本部2号館西端部で確認され、この落ち込みの上位に縄文時代晩期～室町時代の遺物を包含する遺物包含層が堆積している。構内中央部を東－西に分断するB－B'ラインでは、家畜病院（㊺地点）周辺に緩やかに西へ下降する標高約25mの洪積段丘が認められ、その下位の段丘は構内中央部付近にまで裾野を延ばしている。教養部複合棟（㊻地点）西端部付近からは急に西に落ち込み、その西側で谷状の地形を形成し沖積低地へと移行する。それより西側では地山はやや上昇するが、次第に下降しはじめその落ち込みに遺物包含層が堆積する。構内南端部を南東－北西に分断するC－C'ライン。標高約20mの洪積段丘は南東から北西に緩やかに下降し、㊼地点付近から沖積低地へと移行する。構内中央部を北－南に分断するD－D'ライン。標高約20mの洪積段丘は大学会館前庭部南端付近で急激に南に落ち込み段丘崖を形成し、その落ち込み部分に縄文時代晩期～室町時代の遺物を包含する遺物包含層が堆積している。最大堆積厚は約80cm。落ち込み下面の地山の検出面の標高は教養部複合棟付近まで大差ないが、教育学部実践センター（㊽地点）間では地山が落ち込み砂礫層が堆積している。この落ち込みはB－B'ラインの教養部複合棟以西で検出した落ち込みに連続するものと思われ、谷状の地形を形成しているものと思われる。以南は谷から丘陵への立ち上がり部分にあたり、教育学部実習棟（㊾地点）付近が丘陵の最高所に位置する。

以上の所見もとに、標高約20、25mそれぞれの等高線を構内置図に投影すると、概略的に洪積段丘および谷の開析状況を把握することができよう。すなわち、標高約20mの等高線で見ると、構内北部では西へ張り出す段丘面が発達し、中央部および遺跡保存地区（㊿地点）周辺で東から西、もしくは南東から北西へ向かって張り出す緩やかな低段丘が存在し、その間に小規模な谷状地形が形成されていたと推察できる。標高約25mより高位の地域は現在まで調査があまり進展しておらず、得られる知見に乏しい。しかし、学外の東および南東の現地形、農学部実験水田（㊿地点）以東の地域での谷の検出事例、および家畜病院以南の市道での古墳～平安時代の河川跡⁵⁾の検出状況などから、構内に延びる谷状の落ち込みは少なくとも2ヶ所存在すると考えられる。

2 吉田構内の遺跡の変遷

旧石器時代

層的な出土例ではないが、構内南西部に位置する遺跡保存地区から出土したナイフ形石器がある。弥生時代中期後半の第9号竪穴住居跡の埋積土からの出土例で、縦長剝片を

素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。後述するように、遺構検出面は縄文時代晩期の遺物包含層であり、それ以下の堆積層は無遺物層であることが確かめられている。したがって、竪穴住居跡掘削時に旧石器時代の包含層から遊離したとは考えにくく、遺跡保存地区の南東に存在する野球場（㊦地点）周辺の洪積台地からの流れ込みと考えるのが妥当であろう。

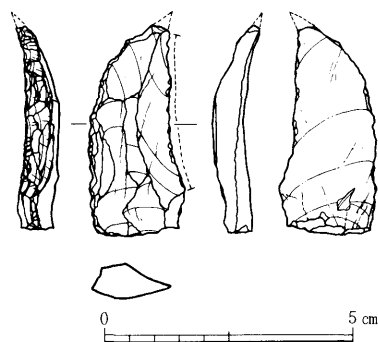


Fig. 81 ナイフ形石器実測図
(吉田構内遺跡保存地区)

野球場はその北東に広がる沖積低地との比高1～2mの標高約20mの閘面と呼ばれる低い洪積台地上に立地

しており、その周囲には台地を刻む浅い谷が開ける。立地的には問題はないと思われるが、同敷地内での調査が進展していない現状では、少なくとも構内南端部周辺に旧石器時代の遺跡が分布する可能性を指摘するにとどめる。

縄文時代

遺構は河川跡2条、落とし穴、土壇各1基が検出されている。河川跡は構内中央部からやや東の農学部連合大学院校舎棟敷地（㊤地点）で、北西から南東に流路をもつ幅約13m以上の晩期の河川跡が検出されている。周辺地形および河川の流路方向などから同敷地の北方に丘陵を刻む谷にその起源をもつものと思われ、閘面の最奥部に位置する馬木段丘の侵食面に沿った流路が想定される。また、教養部複合棟敷地でも北東から南西に流路をもつ幅約29m以上の晩期中頃の河川跡が検出されている。図書館（㊤地点）北方から洪積台地を刻み西に開く谷を開析する河川と思われ、その南に位置する教育学部実践センター間を流路とする。同一面ではこの河川跡のすぐ右岸側に落とし穴が掘削されており、河川を意識した遺構の配置が看取できる。

落とし穴は平面形態が隅丸長方形で、長軸約1m、短軸約80cm、検出面からの深さ25cmの規模をもつ。底面には径約25cm、深さ約60cmの円形の掘り込みが存在する。掘り込みの内部には板状の自然石が詰められており、中央部には間隙が存在する。構内北部に位置する大学会館敷地では同様な平面形態、規模、構造をもつ2基の土壇が検出されている。長軸方向を同じくし、尾根に直交して約5mの間隔をおいて並列する。検出地点は谷頭付近で、谷の埋積土からは早期に属すると思われる石鏃が出土しており、教養部複合棟敷地の例と比べて時期的に遡る可能性がある。吉田構内の南西約1.5kmに位置する小路遺跡⁶⁾、約3kmに位置する西遺跡II⁷⁾でも底面に円形の掘り込みをもち、落とし穴と考えられる土壇が検出されて

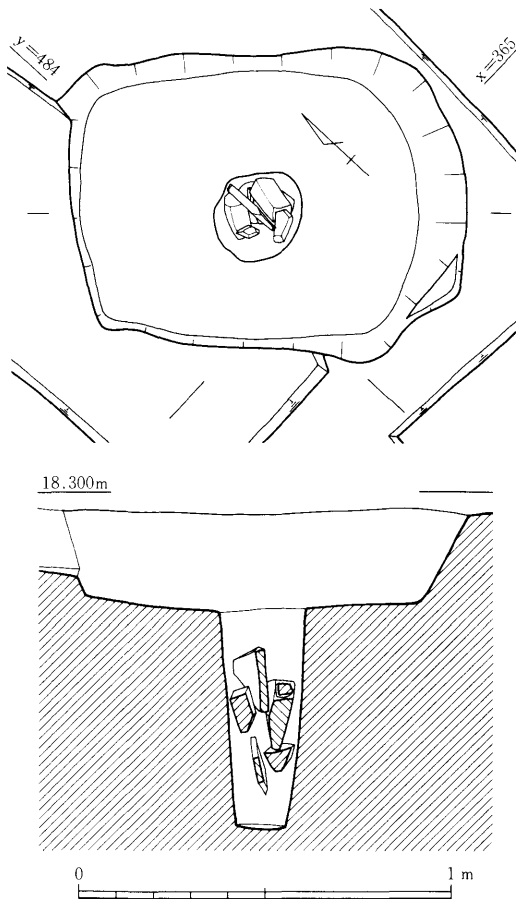


Fig. 82 落とし穴実測図(吉田構内教養部複合棟敷地)

ものと考えられる。青森県鶉窪遺跡⁹⁾、東京都霧ヶ丘遺跡¹⁰⁾など、これまで東日本を中心に多数検出されている落とし穴に普遍的にみられる立地条件である。また、福岡県門田遺跡(門田地区¹¹⁾)、同広田遺跡¹²⁾などのように単独で存在する場合や福岡県立野遺跡、同門田遺跡(辻田地区¹⁴⁾)などのように、埋積土が単層の落とし穴も存在する。したがって、小路遺跡、西遺跡IIの土壌も落とし穴と要素を十分に備えていると思われる。

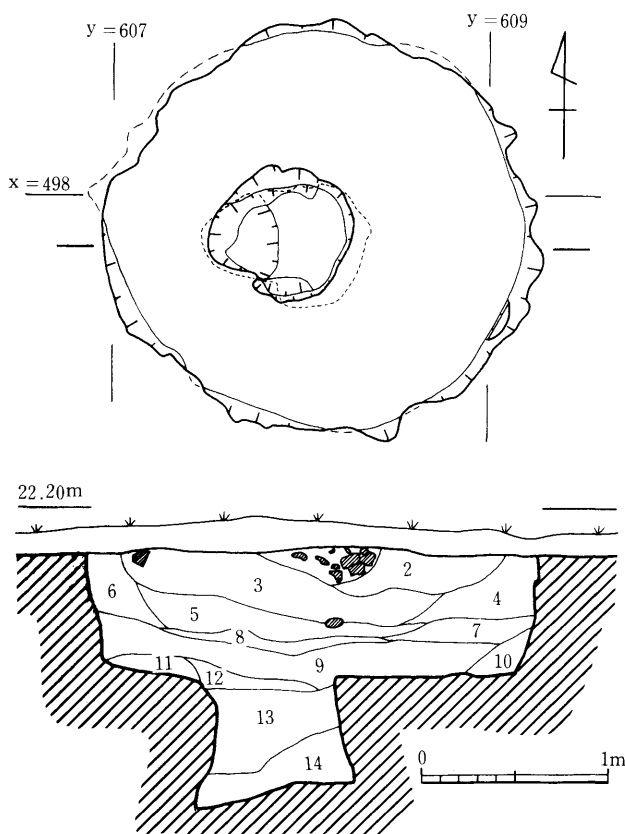
また、沖積面上に立地する遺構は、養護学校敷地(㊸地点)の北端部で検出した晩期後半～終末の土壌がある。

遺物は大学会館敷地、同前庭部、本部2号館、教育学部実習棟、遺跡保存地区、教養部複合棟の計6地点で出土している。教養部複合棟を除く5地点では、弥生時代以降の遺物と混在しており、周辺からの流れ込みであるが、教養部複合棟敷地では晩期中頃の単純層からの出土である。なお、教養部複合棟敷地の所見ではこの遺物包含層の上位には刻目突

いる。調査者は平面形態、規模、構造の類似性から落とし穴としての可能性は認めながらも、単一の埋積土、丘陵尾根上への立地、単独での存在などから落とし穴としての機能に否定的である。検出面からの深さについては大学会館敷地、小路遺跡、西遺跡IIの土壌は、他の遺構の残存状況から後世の削平によって上面を大きく削られていること、また、教養部複合棟敷地の落とし穴の検出面は松尾征二氏が指摘するように、落とし穴の上部に堆積する小路層下部と呼ばれる堆積層の堆積過程で侵食、人為的な地表の改変を受けたと考えられることから、掘削時の深度を示すものではない。また、小路遺跡、西遺跡IIでの検出例が谷および河川を臨む丘陵斜面上に営まれていることは、水呑み場あるいはヌタ場を求めて集まる動物の獣道に意識的に掘削、配置されたもの

吉田構内（縄文時代）

帯文土器の出現した晩期終末の谷状の落ち込みが検出されていることから、弥生時代以降の検出面である黄褐色粘質土で検出される縄文時代の遺構は晩期中頃～終末の時期が与えられることになった。¹⁵⁾ 松尾征二氏はこの黄褐色粘質土がアカホヤ火山灰に特徴的な火山ガラスを含んでいることを指摘し、縄文時代中期～後期頃の二次堆積層であるとしたことはその傍証といえる。なお、教育学部実践センター敷地では姫島産黒曜石の大形剥片が出土しており、出土層順が教養部複合棟敷地の包含層と同一の色調、組成であることから晩期のものと考えられる。



- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1. 暗茶褐色砂質土 | 8. 暗茶褐色砂質土(7層よりやや暗い、炭多く含む) |
| 2. 暗茶褐色砂質土(1層より明るい) | 9. 茶褐色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色砂質土(2層より暗い) | 10. 茶褐色粘質土(地山土混じる) |
| 4. 明茶褐色砂質土(3層土多く混じる) | 11. 茶褐色粘質土(地山土多く混じる) |
| 5. 暗黄褐色砂質土(3層土含まない) | 12. 茶褐色粘質土(地山土少量混じる、9層より粘性強い) |
| 6. 明茶褐色砂質土(4層より3層土少ない) | 13. 暗茶褐色粘質土(地山土、黒褐色土混じる) |
| 7. 暗茶褐色砂質土(ブロック状の粘土を含む) | 14. 暗茶褐色砂質土(地山土混じる) |

Fig. 83 弥生時代前期末～中期初頭の袋状竪穴実測図
(吉田構内大学会館前庭部)

以上のような遺構の分布、遺物の出土状態および周辺地形から、縄文時代の集落、特に晩期中頃以降の居住地は構内の大きく2地域にその分布が考えられる。一つは大学会館前庭部から第二学生食堂付近および教養部複合棟東方のいずれも閨面と呼ばれる標高約20～25m、周囲の沖積低地との比高差約1～2mの洪積段丘上、さらに一つは養護学校敷地周辺の沖積面に立地する集落の展開である。しかし、現在までのところ集落の存在を示す積極的な遺構は検出されておらず、今後の調査に負うところが大きい。

弥生時代

各時期の遺構が検出されている。

前期の遺構は前期末に限定され、それ以前の遺構は検出されていない。わずかに構内南部の野球場南東縁で竪穴住居跡1棟、構内北部の大学会館前庭部で土壌2基が検出されて

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

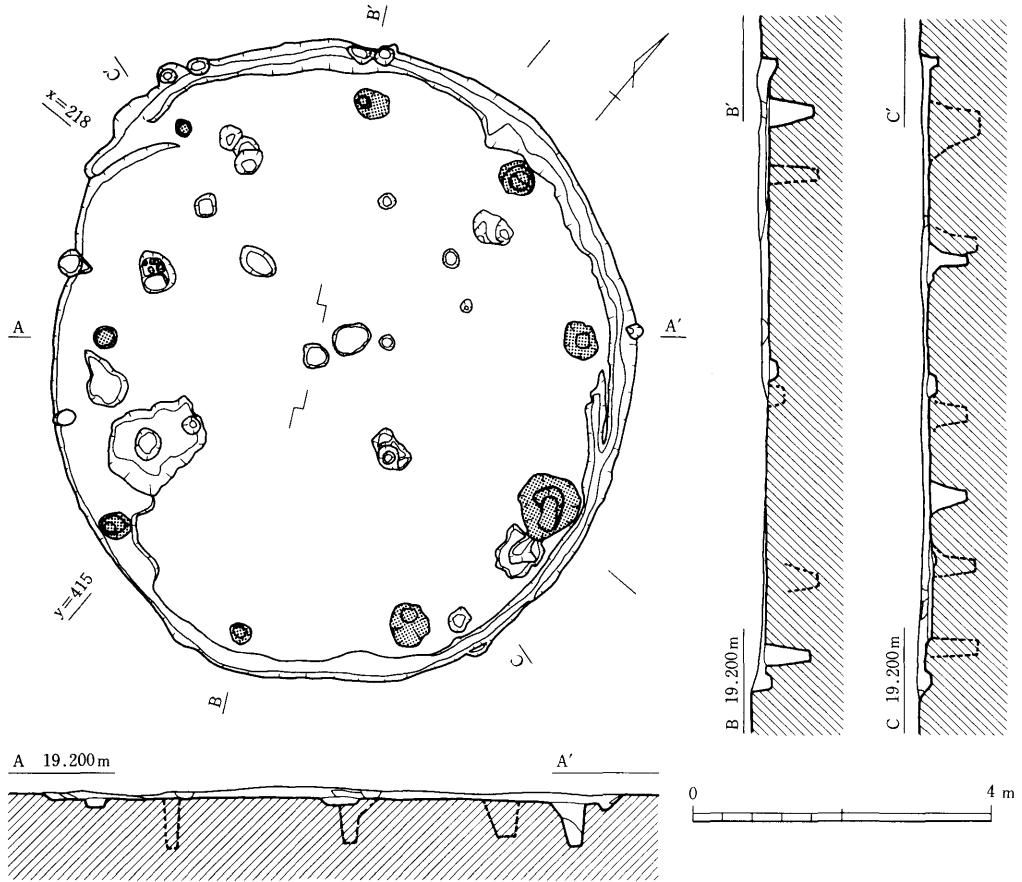


Fig. 84 弥生時代中期後半の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第9号竪穴住居跡）
 いるにすぎない。土壌は前期末以降、県内で盛行する袋状竪穴で段丘の縁辺部に立地する。野球場南縁から南門（◎地点）付近の市道では暗褐色砂質土、粘質土を充填する落ち込みから前期末～中期初頭の遺物が出土している¹⁷⁾。落ち込みの状況、埋積土から土壌もしくは溝と考えられ、構内南部に分布する前期の集落の南方への広がりを示唆する。

中期の遺構は構内南部に集中分布し、竪穴住居跡、土壌、溝などが洪積段丘の先端部に分布する。特に遺跡保存地区から教育学部校舎（◎地点）周辺にかけては竪穴住居跡が広範囲に分布し、前半～中頃3棟、後半7棟および中期のもの4棟が検出されている。土壌は前半～中頃5基、後半15基が分布する。遺跡保存地区では後半の竪穴住居跡の周囲を内径16～17mの規模で弧状に巡る上面幅1～1.2mの溝が検出されている。弥生時代における同時併存する住居間には最低約20m以上の距離が必要であると想定されており¹⁸⁾、溝と住居の空間地には同時期の他の住居の併存は考えられない。また、この空間地には2基の土壌が並列し、住居に付設する土壌と考えられる。したがって、溝で囲まれた約250㎡前後のエリ

アがこの地域周辺での中期後半の住居 1 棟あたりの一般的な占有面積として確保されたことが想定される。

また、ラグビー場（Q地点）東端では上面幅約5.5m、検出面からの深さ約1.1mの規模をもつ中期後半の大溝が検出されている。この大溝はその規模から用排水等の機能をもつ溝とは考えられず、遺跡保存地区周辺の集落の環濠である可能性が高い。構内南部での中期の遺構の多さに比べて構内北部、大学会館周辺の洪積台地上に立地する遺構は極めて少なく、袋状竪穴 2 基を含めた土壇 3 基が存在するにすぎない。段丘の最高所に位置する第二学生食堂以南、以西ではこの時期の遺物は出土しておらず、地形的にも大学会館、本部 2 号館、大学会館前庭部では、地山がそれぞれ北、西、南へ大きく落ち込んでおり、集落の立地面積は広くはない。南部構内での集落規模の優位性の反映と考えられる。

中期は外来要素の流入期でもある。そのひとつは下城式土器で遺跡保存地区で中期前半、後半の甕の出土がある。西遺跡¹⁹⁾、内陸部の阿武郡阿東町突抜遺跡²⁰⁾では中期初頭、防府市大崎遺跡²¹⁾では中期後半の下城式土器が出土しており、周防部では中期全般を通じて東九州の土器文化が断続的に流入したことを示している。須玖式系の土器も普遍的にみられる。

後期では中期の立地を踏襲し、構内南部の集落規模の優位性には変化は認められない。構内南部は前半では竪穴住居跡 1 棟、土壇 6 基、後半～終末・庄内併行期では竪穴住居跡 5 棟、土壇 7 基の分布状況を示す。北部は前半では竪穴住居跡は検出されておらず、土壇 1 基、後半～終末・庄内併行期では竪穴住居跡 1 棟、土壇 2 基がともに洪積台地の縁辺部に立地する。

また、この時期には系譜の異なる 2 つの土器文化が流入する。ひとつは口縁部が内弯して立ち上がる東瀬戸内系の高坏の出土で、共伴する土器から後期中頃のものと思われる。また、口縁部に凹線もしくは凹線状の沈線をもつ後期中頃の甕や複合口縁をもつ後期終末の甕など山陰系の土器の流入である。

したがって、弥生時代では前期の集落の立地は構内南北両地域とも洪積台地の頂部付近に立地しているが、中期になると南部の地域では緩やかな傾斜をもつ洪積台地の先端部付近にまで居住規模を拡大し、中期後半の段階では環濠をもつ集落を出現させる。さらに、環濠内には住居の附属施設として土壇 2 基を付設し、小規模な溝に囲まれた構造的には自立性の高い住居が存在する。構内南部地域の集落規模の優位性は後期まで引き継がれる。

古墳時代

構内南北両地域の集落に大きな変化がみられる。すなわち、弥生時代中期～後期にかけ

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

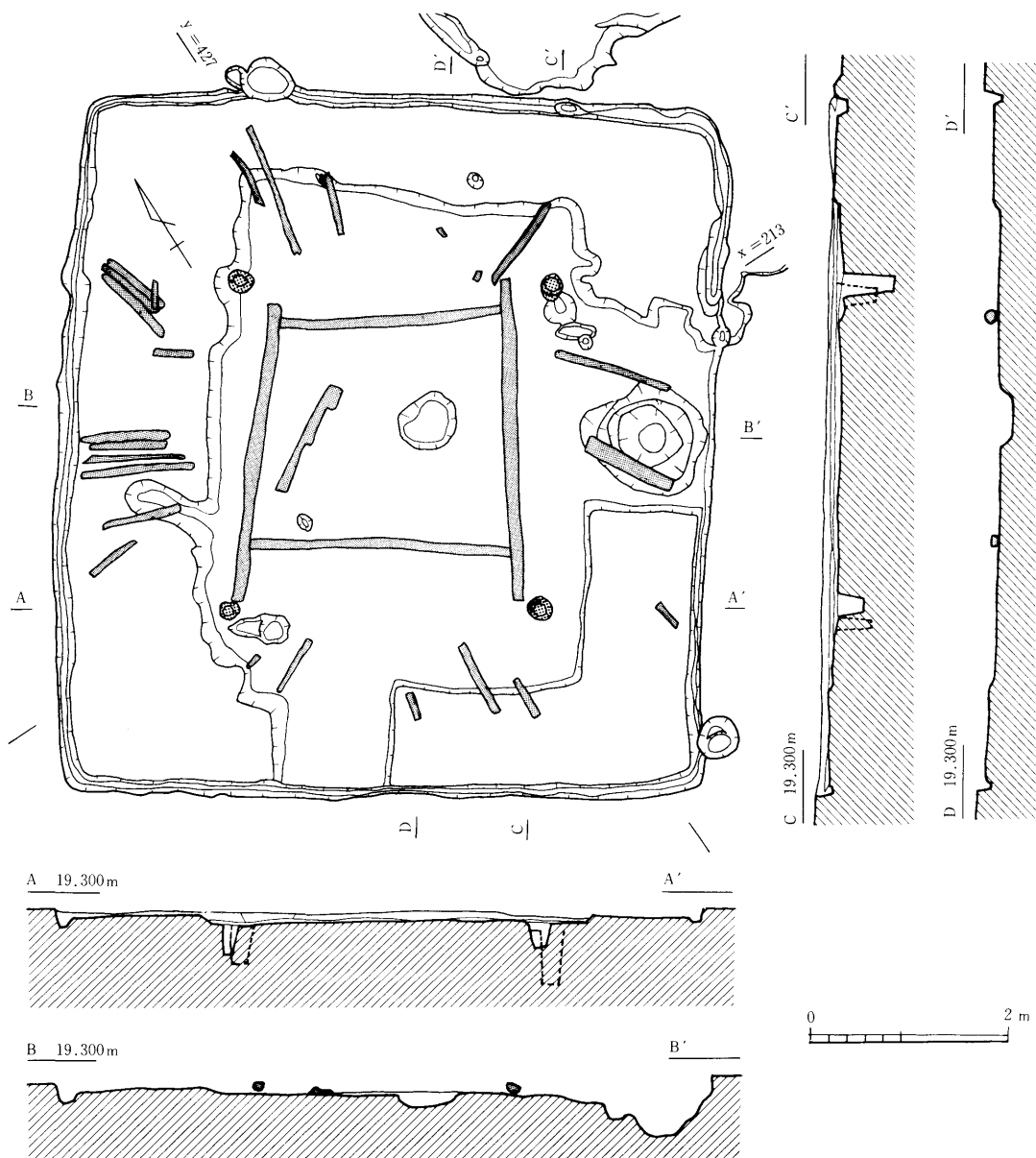


Fig. 85 弥生時代終末の竪穴住居跡実測図（吉田構内遺跡保存地区第13号竪穴住居跡）

て盛興した南部地域の集落は突然姿を消す。それと呼応するかのように構内北部の地域では洪積台地状の頂部平坦面には竪穴住居跡5棟、さらにその縁辺部に土壇、台地を刻む谷の谷頭部には井戸が営まれ、台地上を居住空間とする一様の居住環境を備えた遺構配置となる。この時期の集落は唯一この一帯に分布し、その後の構内遺跡の中核となる集落を形成するが、竪穴住居跡の検出された第二学生食堂付近は、統合移転に伴う削平によって旧

地形が大きく変化しており、往時の埋蔵文化財の分布状況を示していないと考えられる。集落の生産基盤となる可耕地はその全面的広大な沖積低地が求められたと推察される。

後期の集落もこの地域に存在しないわけではない。大学会館、本部2号館、図書館などの敷地では、遺物包含層中に6世紀後半の須恵器が含まれている。しかし、他の器種に比べて量的には極めて少なく、集落規模はさほど大きくなかったと推察される。この時期の竪穴住居跡はこれらの地域から北東約300mに位置し、北東から南西に開く谷を臨む標高約30mの馬木面上に立地する牛舎敷地(®地点)で2棟が検出されている。構内でもこの時期の竪穴住居跡は少なく、集落は相対的に小規模で集住的要素が少ないと思われる。なお、構内の北方に位置する日吉神社の所在する丘陵斜面には6世紀後半～7世紀前半の横穴墓7基が存在する²²⁾。姫山から南へ派生するこの丘陵は、構内に接するあたりで急激に西側に落ち込み沖積面に達する。吉田構内でのこの時期の集落立地を考えると、日吉神社以西の沖積低地への展開は考えられないことから、横穴墓の造墓集団は吉田構内の集落の構成員である可能性が高い。しかし、横穴墓の基数と吉田構内の集落の住居数には隔たりがあまりにも大きい。したがって、当該期の集落は段丘上の未調査地域に分布している可能性が高く、少なくとも、古墳時代では集落の拠点が構内北部に移行していることが窺われる。

古代

現在までのところ、検出した遺構はないが、遺物包含層の出土資料をもとに類推可能である。構内南部の遺跡保存地区周辺では奈良時代以降、古代～中世の遺構は全くといってよいほど検出されず、出土遺物もほとんどない。集落の拠点となる地域は第二学生食堂－大学会館－同前庭部－本部2号館敷地等の所在する構内北部の洪積台地上である。これらの敷地から出土した須恵器の大半は8世紀～9世紀前半で、土師器は9世紀代に遡るものが含まれているが大半は10世紀後半～12世紀代である。また、12世紀中頃～13世紀前半の貿易陶磁器、10世紀代の黒色土器、12世紀～13世紀代の和泉型の瓦器碗も出土している。須恵器には円面硯（9世紀初頭）、墨書のあるもの（9世紀中頃）や銚帯（8世紀末～9世紀初頭）、付札など特殊な遺物が含まれている。これらは一般の集落ではもちえないもので、森田孝一氏が述べるように²³⁾中央集権的な律令国家体制に組み入れられた官衙的施設の存在が指摘されるが、現在までのところ関連する遺構は検出されていない。この時期の遺構は第二学生食堂の南東から家畜病院付近までの沖積低地を臨む台地上に馬蹄形状に展開していた可能性がある。以上のように、奈良・平安時代では構内遺跡の性格は大きく変化したと考えられる。

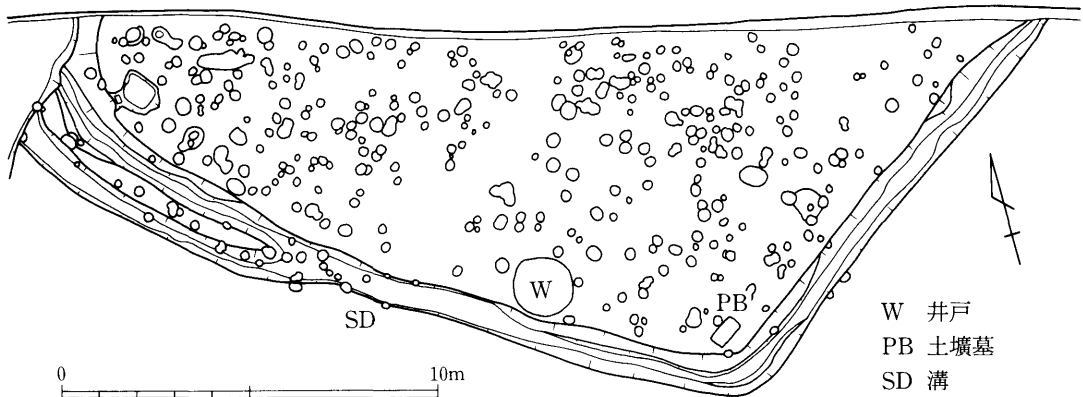


Fig. 86 室町時代の溝で囲まれた屋敷跡実測図（吉田構内本部2号館敷地）

中世 遺構は構内北部の本部2号館敷地で、溝に囲まれた16世紀末～17世紀初頭の屋敷跡がある。県下では防府市下右田²⁴⁾遺跡、防府市玉祖²⁵⁾遺跡などで認められるように、「コ」の字形に巡る溝の内部に井戸、土壌墓を併設する屋敷構造で、中世の富裕農民層の屋敷構えに共通する要素である。溝は完掘した一辺が約21mで、沖積低地を臨む標高約21mの丘陵上に占地する。溝の内側を完掘していないため、建物配置は明らかでないが、検出される柱穴の規模は一般のものと大差ない。

江戸時代

この時期の遺構の分布は詳しくは把握できていないが、沖積低地を臨む洪積段丘上に立地する教養部複合棟敷地で検出した17世紀代の掘立柱建物、井戸、埋甕土壌がある。掘立柱建物は1間×3間、1間×2間の小規模な2棟で、両建物に近接して素掘りの井戸、埋甕土壌が存在する。掘立柱建物の棟方向は直交し、井戸、埋甕土壌を併設する屋敷内の一連の建物と考えられる。吉田構内では中～近世の遺物は構内の各所で散発的に出土しているが、遺構は検出例が極めて少なく、集落復原への支障となっている。資料の増加を待つと言及することにした。

小串構内

総面積は約11万2千㎡で、平成3年度までの調査件数は21件である。昭和57年度以前の段階では遺跡の存在は全く知られておらず、同構内で最初に行った体育館敷地で旧石器時代および室町時代の遺物が出土したことで遺跡として周知されるに至った。小串構内は宇部市街地の北辺、埋積谷や小盆地を開析しつつ南流する真締川中流域の右岸に位置し、真締川による洪積台地の侵食によって形成された標高1.5～3mの沖積低地に立地する。真締川流域には遺跡は少なく、周辺の低丘陵および段丘上に弥生時代から古墳時代の遺跡が散

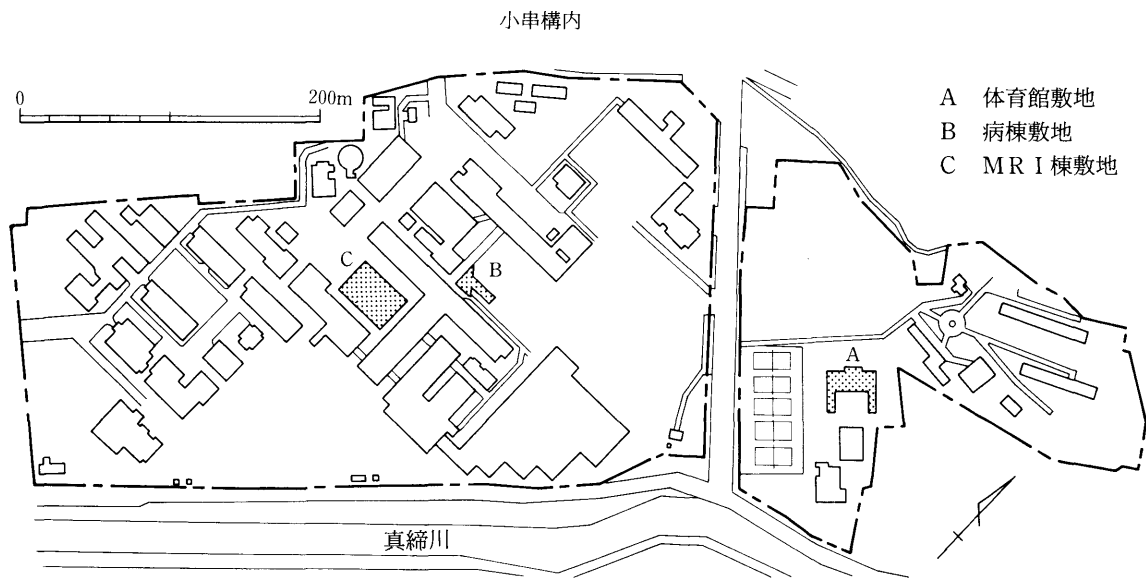


Fig. 87 小串構内旧石器時代の遺物出土地点位置図

在する。²⁷⁾これまでの調査での出土遺物は旧石器時代と室町時代との大きく2時期に大別されるが、各遺物の出土層順は旧水田耕作土、床土もしくは周辺の高所からの流れ込みによる二次堆積層からである。以下では、小串構内での遺跡の性格を反映すると思われる3地点での調査成果を述べる。

体育館敷地

小串構内で遺跡が周知されるに至った調査である。調査地点は構内の東端部に位置する。地表面の標高は約1.5mで、旧水田耕作土、床土の下位に上位から青黄灰色粘土、青灰色粘土、植物遺体を含む青灰色粗砂が堆積する。出土遺物には旧石器時代と室町時代のものがある。旧石器時代に属するものにはナイフ形石器、削器、剥片、細石核など5点があるが、地表面から約1.8m下位に堆積する青灰色粘土から出土した削器を除いてすべて旧水田耕作土あるいは床土からの出土である。出土した石器はいずれもチャート製で、このうち、ナイフ形石器は切出形を呈し、横長剥片を素材とする一側縁加工のものである。また、細石核は2点あり、小円礫を素材とし、原礫面を打面とするものと打面調整された平坦な単設打面をもつものが存在する。後者は角錘状の最終形を呈するが、打点の方向は一定していない。

室町時代の遺物には床土、青黄灰色粘質土から出土した土師器、瓦質土器、磁器などがあるが、いずれも摩滅が激しく小破片が多い。床土以下の出土遺物は層位的には区分され、下位の堆積層に旧石器時代の遺物を包含するが、その堆積層はグライ度の強い不安定な二

次堆積層である。

病棟敷地

調査地点は構内のほぼ中央部に位置し、初めて旧石器時代の単純層を検出した。地表面の標高は約2.6～2.7mで、旧耕作土、床土およびそれ以下のオリブ灰色もしくは灰色系の色調を呈する砂質土、砂の堆積層の上位では、体育館敷地同様、旧石器時代と室町時代の遺物が混在する。しかし、地表面から約140cm下位に堆積する灰色砂層は旧石器時代の遺物を包含する単純層で、ナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石、剥片など67点が出土した。調査区内での平面的・垂直的な集中部は認められない。

ナイフ形石器は2点あり、縦長剥片を素材とする二側縁加工のものである。うち1点は玻璃質安山岩製で、背面側は対向する剥離面で構成されており、両設打面石核の存在が考えられる。共伴する剥片は背面側の剥離面の方向が主要剥離面の打撃方向とほぼ同じ面と約90度ずれる剥離面をもつものが多く、4～5枚の剥離面で構成されている。また、側面に原礫面を残す小ぶりなものが多く、拳大の円礫状の原石の存在が予想される。打面は原礫面を打面とするものが多く、調整打面をもつものは少ない。使用される石材は、チャート、メノウ、玻璃質安山岩、黒曜石（姫島産・腰岳産）、水晶、蛇紋岩などでチャート、メノウ、蛇紋岩の占める割合が多い。通称宇部台地と呼ばれる洪積層からなる3段の海岸段丘²⁸⁾上に立地する、旧石器時代の遺跡群（宇部台地遺跡群²⁹⁾）の石器類の石材も同様な石材選択状況で大きな差異はみられない。なお、姫島産黒曜石は宇部台地遺跡群では縄文時代以降の石器素材として用いられており、病棟敷地の一部の石器は縄文時代に遡る可能性もある。

MR I 棟敷地

調査地点は構内のほぼ中央部、病棟敷地の南西約40mに位置し、旧石器時代と歴史時代の遺物が出土した。旧石器時代の石器群は削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核など計12点で、病棟敷地での出土点数に比べて少ない。出土層順は旧耕作土、床土およびそれ以下の灰色系の色調を呈するグライ度の強い堆積層である。旧石器時代の単純層は認められず、石器を包含する灰色系の堆積層には歴史時代の遺物が混在し、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。石器類は背面と主要剥離面との剥離方向が約180度ずれるものや背面が対向する剥離面によって構成されるものがあり、両設打面の石核の存在が予想される。また、打面は原礫面を打面とするものと調整打面をもつものがある。使用される石材はチャート、姫島産黒曜石、玻璃質安山岩、蛇紋岩、流紋岩などで、出土点数に比

小串構内



Fig. 88 旧石器時代の遺物実測図 (小串構内病棟敷地)

べて多種にわたり、病棟敷地同様、多様な石材を用いている。このうち、流紋岩を石材とする細石刃は背面に原礫面を残す第一次剥片で、宇部台地遺跡群でも類例がほとんどみられない石材である。剥片長から小ぶりの円礫素材の細石刃核が想定される。

以上述べたように、小串構内は県内では極めて少ない旧石器時代の遺物が出土する遺跡である。石器類は必ずしも同一時期の遺物包含層からの出土ではないため、石器組成を十分には反映しないが、ナイフ形石器文化期および細石器文化期大きく2時期に区分される。器種はナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石、細石刃、石核、細石核などで、剥片類が大半を占める。使用される石材も宇部台地遺跡群同様、多種にわたる。なかでもチャートの占める割合が約半数で、蛇紋岩を除くとその他の石材は極めて少量である。特に、流紋岩は宇部台地遺跡群でも南方遺跡³⁰⁾に1点だけみられる石材である。石器類は原礫面を打面とし、素材面に原礫面を残すものが多く、打面調整が行われるものは少ない。宇部台地遺跡群では姫島産黒曜石は旧石器時代の石器群には使用されておらず、小串構内の一部の石器は縄文時代に属するものが含まれている可能性がある。

現在までのところ、石器類は構内の東部および中央部で出土しており、海拔標高約1.5m前後に堆積する灰色系の砂層に包含されている。この包含層は真締川に沿って形成された谷底平野に堆積する高所からの二次堆積層で、プライマリーな堆積状況を示していない。小串構内の北方には北から南へ延びる標高約10mの低丘陵が存在し、構内で出土する石器群はこの丘陵上に所在が予想される旧石器時代の遺跡からの流れ込みと考えられる。同様な遺跡立地は小串構内の北東約1.2kmの真締川右岸に所在する川津遺跡³¹⁾があげられる。構内には上記3地点での旧石器時代の遺物包含層と同様の色調、粒度、組成をもつ堆積層が普遍的に分布しており、堆積の要因などから今後の調査によって出土量が増加するのは確実であろう。

常盤構内

侵食谷を臨む標高約40mの洪積台地上に立地し、総面積は約13万2千㎡である。東方約300mの同一段丘面上には旧石器時代から縄文時代早期の遺物が採集されている常盤池遺跡³²⁾が所在する。常盤構内での調査は立会調査が中心で、平成3年度までの調査件数は9件である。立地的には構内に旧石器時代から縄文時代の遺跡が分布する可能性は十分に考えられるが、現在までのところ、構内の中央部からやや南に位置する会議棟敷地で須恵器、磁器が出土しているにすぎない。構内の旧地形は北部が北から南へ、西部が東から西へ樹枝状に張り出した洪積台地の頂部および基部にあたり、構内東部の学生食堂付近が台地の先端部付近

常盤構内

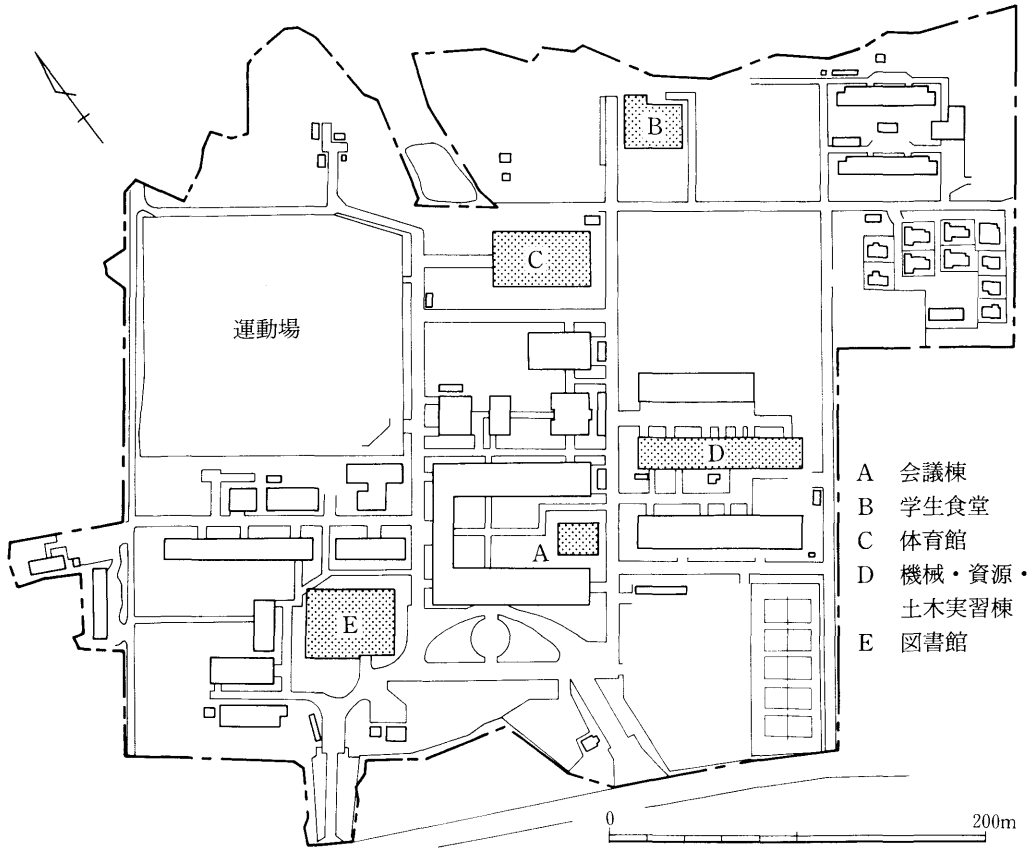


Fig. 89 常盤構内配置図

にあたる。構内の洪積台地は小規模な侵食谷に開析され、特に、西側の運動場の大半はこの侵食谷を埋積して造成されたものである。常盤構内の現況は基本的には東から西へ延びる洪積台地を北から南へ向かって階段状に4段にわたって平坦に造成されている。すなわち、上位から体育館以北の地域、体育館と機械・資源・土木実習棟との間の地域、機械・資源・土木実習棟と図書館北半部との間の地域、および図書館南半部以南の地域の各平坦面によって構成されている。各平坦面では構内造成時の埋め土の直下が赤褐色あるいは黄褐色粘質土の洪積層で、平坦面の境界崖面には造成によって洪積層が露出しており、削平が広範囲に及んでいることを示している。調査は各平坦面で行っているが、いずれも調査規模が小さく、構内の埋蔵文化財の有無を提示できる調査成果は得られていない。

亀山構内

亀山構内は吉田構内の北約3kmの山口盆地の北西部に位置する。周辺の間を開析する

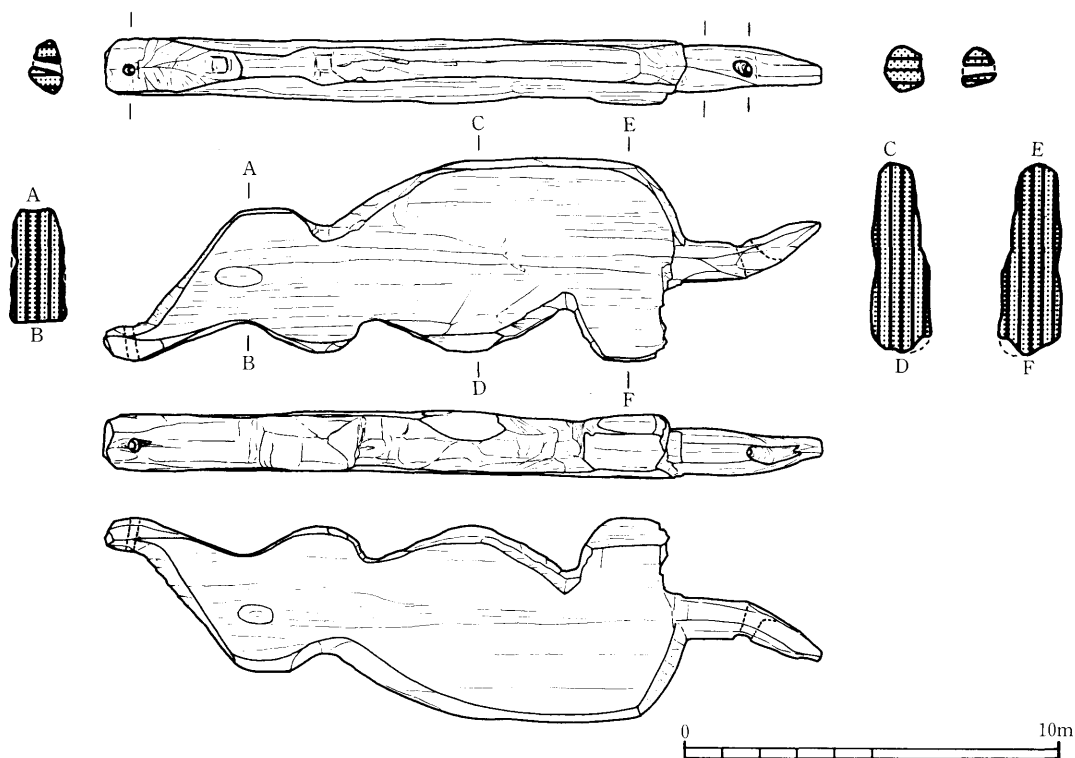


Fig. 90 鳥形木製品実測図（亀山構内教育学部附属山口小学校敷地）

河川の出口付近には小扇状地が盆地床に向かって張り出し、山麓帯には扇状地状の台地が形成されている。亀山構内はこの山口盆地の北西部に位置する標高約340mの鴻ノ峰の南麓裾部およびその前面に広がる沖積低地^{3.3)}に立地し、教育学部附属幼稚園・同小学校と附属中学校の敷地の総称である。

附属幼稚園・同山口小学校敷地

総面積は約2万5千㎡で、平成3年度までの調査件数は9件である。敷地内は北側の上位から標高約36mの幼稚園敷地、標高約34mの小学校東側の校舎敷地、および標高約33mの小学校西側の運動場敷地の大きく3段の平坦面で構成されている。遺跡の存在が周知されるに至ったのは昭和58年度のことで、小学校西側の運動場での溝状遺構と竪穴住居跡の検出が契機であった。

溝状遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭のもので、運動場の北西端部に位置する。地表面から約20cm下位で検出したが、トレンチによる調査のためその規模は明らかにし得ない。出土遺物は壺、甕、高坏などの土器類のほかに最下層の黒色粘土から自然木などと

亀山構内（附属幼稚園・同山口小学校敷地）

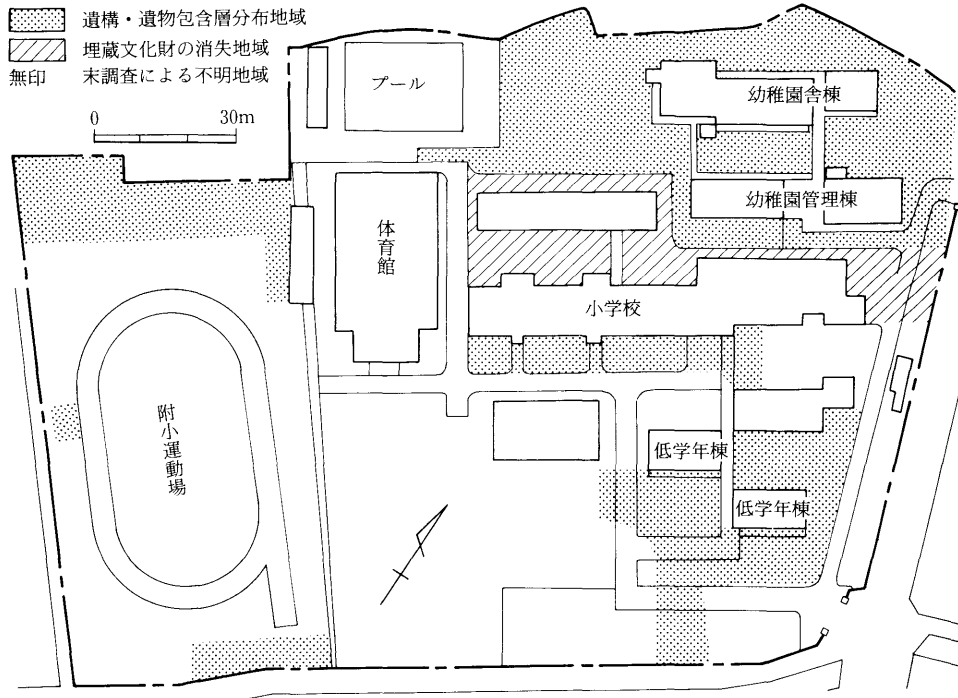


Fig. 91 亀山構内（教育学部附属幼稚園・同山口小学校）の埋蔵文化財分布図

もに出土した鳥形木製品、鋤、鍬、案などの木器がある。木器は農具、日常用具、祭祀用具で構成されており、このうち、鳥形木製品はその使用方法を理解できる好例で、尾の部分が竿に装着されたままの状態出土した。偏平な板状を呈し、頭部は比較的大きく水鳥を思わせるやや長い先細りの嘴が表現されている。腹部はやや丸みをおびてふくらみ、比較的安定した脚部を造出する。尾部は長く、中位から後方は上位に屈曲し先細りとなる。嘴および尾部には穿孔が施されており、出土状況から尾部の穿孔は竿への装着時の目釘穴と思われる。竿は下端部が欠損しているが現存長106cm、最大径2.9cmの直線的な枝木を用いている。小枝は打ち払われているが表面の大半部分には樹皮が残存しており、全体の表面加工はほとんどなされていない。

竪穴住居跡は運動場の南東端部に位置し、地表面から約70cm下位で検出した。平面形態は方形系統で床面までの深さは検出面から約20cmである。住居北辺の壁面には住居内部に向かって黄色粘土が突出しており、その内側には焼土が認められることから竈と推定される。出土遺物から5世紀前半頃のもので溝状遺構とは時期が異なる。なお、竪穴住居跡は東方約25mの地点でも検出されており、弥生時代後期後半から庄内併行期のもの2棟、中～後期のもの1棟がある。したがって、幼稚園・小学校敷地では弥生時代中～後期、後期後半

から庄内併行期、および布留式併行期の少なくとも3時期の住居が営まれていることになる。幼稚園敷地の北端部で検出した河川跡、小学校校舎敷地の中央部付近の北側の低学年棟の南で検出した、東から西へ開く谷状の落ち込みからも同時期の遺物が出土していることもその傍証である。この谷状の落ち込みは、運動場の中央部付近に黒色もしくは黒褐色の砂質土、砂が堆積していることから、さらに運動場西端まで分布している可能性があるが、現段階では特定できない。居住地は運動場南半部から小学校校舎敷地の地域が考えられ、主体となる時期は庄内併行期から布留式併行期で、比較的短期間のうちに営まれた集落の存在が予想される。周辺では鴻ノ峰南麓の丘陵上に茶臼山墳墓群³⁴⁾、鴻ノ峰古墳群³⁵⁾、白石古墳群³⁶⁾など、弥生時代終末から古墳時代にかけての埋葬跡が多数存在するが、確実な集落跡は小学校敷地が唯一の検出例である。

なお、幼稚園敷地の下位に位置する小学校敷地の北端部から中央部付近にかけての地域は、地表面から約40cm下位まで客土されている造成土の直下が同構内の遺構面である黄褐色粘質土で、構内の他の地域とは大きく土層の堆積状況が異なる。現在の地勢からこの付近の地域は鴻ノ峰から派生する丘陵が削平を受けているものと思われ、遺構が消失している可能性が高い。なお、この他に遺構には伴わないが、縄文時代晩期、平安時代中期の黒色土器A類、室町時代後期の大内氏館跡でいう「B式土師器」³⁷⁾が出土していることも付記しておく。

附属山口中学校敷地

総面積は約1万6千㎡で、平成3年度までに5件の調査を実施している。これまでの調査は校舎の周囲に集中しており、東半部については不明な点が多い。校舎・運動場は標高約28mで地表面は平坦に近いが、構内北西部に所在するプール敷地はこれより約1m上位に位置する。遺構は南北に長い校舎の南半部周辺で北東-南西に走行する溝状遺構2条が検出されているが、時期を決定できる遺物は出土していない。しかし、校舎西側の地域では地山の南側への落ち込み部分に庄内併行期を主体とする遺物包含層が堆積している。包含層は層厚約30cmで地表面から約30cm下位で検出される。3層に分層されるが、各包含層の出土遺物には時期差は認められない。出土遺物には壺、甕、鉢、高坏、支脚などがあり、在地系、山陰系、畿内系など系譜の異なる3種の文化要素をもつ土器群で構成されている。プール敷地東端部付近にも同時期の遺物包含層が堆積している。西側校舎の東側では地表面から約30~40cm下位で黄褐色粘質土の安定した地山が検出されており、包含層上面での検出面の標高と大差ない。したがって、遺物包含層は西側の校舎およびプール敷地付近以

亀山構内（附属山口中学校敷地）

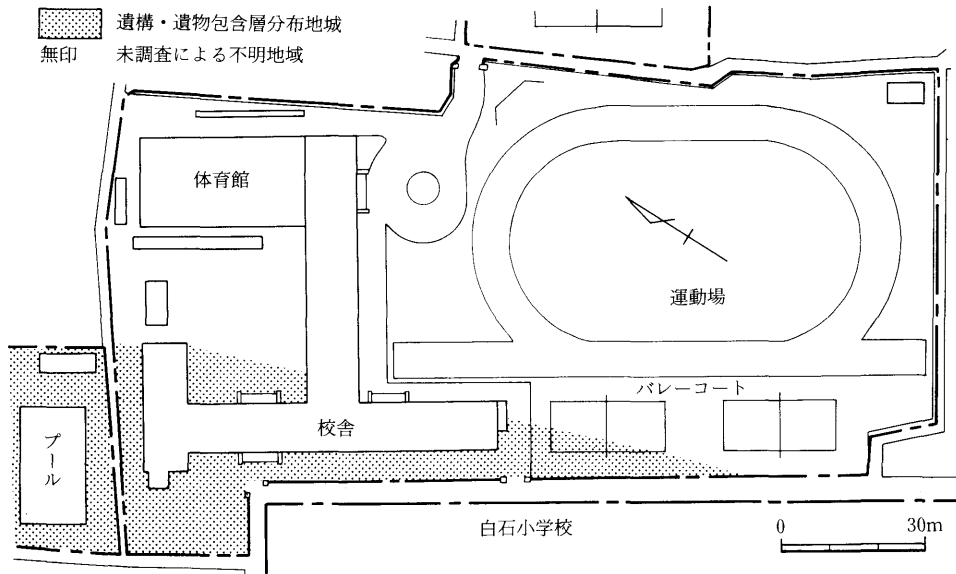


Fig. 92 亀山構内（教育学部附属山口中学校）の埋蔵文化財分布図

西および以南から白石小学校にかけてその分布範囲をもつものと考えられる。

また、庄内併行期の遺物包含層の下位には、縄文時代晩期の遺物包含層が堆積している。周辺での縄文時代の遺跡は、中学校の東に位置する標高約65mの亀山を隔てた沖積扇状地に立地し、河川による扇状地を形成する段階での二次堆積層に遺物を包含する後河原(松柄)³⁸⁾遺跡や、洪積台地もしくは丘陵上に立地する桜畠遺跡³⁹⁾などが知られているにすぎない。中学校敷地は東に位置する亀山によってこれらの河川の堆積作用を受けにくい地理的条件にあることから、上記の遺跡とは異なる低地指向型の縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。その分布は立地等から構内北西部から以北の地域が想定される。運動場の敷地はほとんど未調査で地下の状況は明かでないが、中学校敷地の東半部、体育館から運動場にかけての地域は小学校敷地での遺構の検出面である黄褐色粘土の分布が予想され、庄内併行期の遺構の埋存している可能性がある。

光構内

山口県の南東部、光市室積浦に所在する教育学部附属光小・中学校構内とその周辺に展開する縄文時代から室町時代を主とする遺跡で、「御手洗遺跡」として周知⁴⁰⁾されている。室積の海岸部には、その西に位置する島田川の排出する土砂の東側への漂移現象によって砂浜が発達し、光構内の存在する室積半島は旧来島であった峨嵋山^{がび}との間に形成された陸繋島である。光構内はこの峨嵋山北縁の御手洗湾に面した標高約3.5mの砂州に立地⁴¹⁾する。敷

光構内

平成2・3年度は構内の内側で調査を行った。平成2年度は構内の北部および北西部の小学校運動場敷地で調査を行い、運動場北縁、東縁で遺物包含層を検出した。出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土錘など、縄文時代および古墳時代から鎌倉・室町時代のものである。出土遺物の時期的な組成は中学校体育館敷地と大差ないが、包含層は黄褐色もしくは赤褐色系の砂で、その色調、組成が大きく異なる。また、包含層は地表から約40～50cm下位で検出されており、中学校体育館敷地で検出された包含層上下両面の北西への下降傾向とは様相を異にしている。色調、堆積深度から両者は異なる堆積層である。また、小学校運動場東縁の南端部に位置する体育館付近で、光構内では初めて遺構を検出した。上下2面の検出面をもち砂層を掘り込む5基の土壌である。土壌は狭い範囲に近接して掘削されており、また、下面の土壌は切り合い関係にあることから少なくとも3時期の遺構が存在する。出土遺物が少なく時期はよくわからないが、土壌の上層に堆積する遺物包含層からの出土遺物から6～7世紀頃のものと思われる。なお、土壌の掘り込み面が砂層であることから、貯蔵等を目的とし日常生活に密接した一般の土壌とは性格を異にするものであろう。

平成3年度は構内の南端部のプール東側で実施した調査でも溝状遺構、土壌などを検出した。遺物包含層は地表から30～40cm下位に堆積する褐色系の砂質土で、同一層に古墳時代、鎌倉時代および江戸時代などの大きく時期の隔たる遺物を包含する。調査地点はその南側に位置する峨嵋山の谷あいの延長部分にあたり、出土した遺物はその谷あいを臨む丘陵上に営まれた当該時期の遺跡からの流入品と考えられる。また、中学校運動場の南端部でも地表から約50cm下位に堆積する黄褐色系の海成砂層から鎌倉時代の遺物が出土していることから光構内の遺物包含層の堆積が一様でなく、数層におよぶことを示唆している。

光構内でのこれまでの調査は点的な調査に終始しているが、遺物包含層は埋蔵文化財地図に示したように構内全域に分布範囲をもつことが予想される。また、色調の異なる遺物包含層の堆積層順、遺物様相、小学校体育館付近で検出した古墳時代を主とする土壌群の性格、その分布範囲や他の遺構の有無など構内に分布する遺跡の性格の解明とあわせ将来の残された課題である。しかし、構内の堆積層は砂あるいは砂礫で構成されていることから居住の適地とは考えられず、遺跡の主体は峨嵋山もしくは月待山北麓の丘陵上に存在するものと思われる。なお、同様に砂堆上に立地する遺跡として宇部市月崎遺跡⁴⁴⁾、山口市美濃ヶ浜遺跡⁴⁵⁾などがあり、両遺跡では洪積台地の上部に堆積する海成砂礫層に縄文時代前期以降の遺物を包含している。光構内でもその南に位置する峨嵋山の一部は洪積台地を形成

しており、両遺跡に共通する立地条件にある。しかし、光構内では美濃ヶ浜遺跡のように製塩土器の出土例はなく、出土遺物の量、質からも半農半漁の小規模な集落が近傍一帯に存在することを示唆している。

4 遺跡の整備・活用に向けて

以上、述べてきたように山口大学構内遺跡は山口市に所在する吉田・亀山構内、宇部市に所在する小串、常盤構内、および光市に所在する光構内の各キャンパスに分布する旧石器時代以降の複合遺跡の総称である。なかでも、吉田構内は弥生～古墳時代の集落跡として、昭和41年の統合移転工事に伴う調査以後、継続的に調査が実施されており、埋蔵文化財の分布状況を知る調査データが他の構内に比べて比較的蓄積されている構内である。この吉田構内の南西部には計21棟におよぶ弥生～古墳時代の堅穴住居跡が分布しており、教育・研究資料として吉田構内を代表する遺構分布地域であることから「遺跡保存地区」として現地保存されている。しかし、各遺構は調査後再び埋め戻され公開・活用は全くなされていないのが現状である。本稿は、空間を単なるスペースとしてではなく、新しい付加価値をもち、かつ現代的な利用形態がはかれる形で機能させるためのひとつの方法を提示するものである。

遺跡の現地保存はそれ自身、保存措置として極めて重要であるが、それとともに学内の環境整備の一環として、遺跡の構成要素である各遺構を修復し、遺跡本来の機能を表現できるように整備することによって、積極的な利用形態を図ることもひとつの効果的な保存、活用措置といえるのではあるまいか。そのために公共施設として整備し、歴史を追体験できる現代的な文化ゾーンとして公園化するのもひとつの有効な手段と考えられる。それには、住居の構造、形式の時間的な変遷過程が歴史的に理解できるように整備することが必要であろう。また、それとともに、教育・研究にふさわしい快適な居住空間を確保するために、遺跡が立地した往時の生活環境の復元を含めた植樹・植栽などの環境整備によって、憩いの場としての機能をもたせることも重要であろう。さいわい、「遺跡保存地区」は第一学生食堂や運動場、サッカー場などの福利厚生施設に隣接しており、環境整備によって遺跡とマッチングしたゾーンとして十分に機能しうるであろう。すなわち、歴史を単なる概念としてではなく実感、追体験できる、学習機能を付与した現代的な歴史ゾーンとして開放的に復原し、遺跡のリハビリテーションをはかるとともに、ワーキングミュージアムとして活用することである。

そのための基本作業として、

- 1 稲作受容期から古代国家成立までの集落構造、住居形式、遺跡保存地区の歴史的な位置や性格について通史的な視角からの体系的な検討
- 2 『土地分類基本調査』に基づく地形、表層地質、土壌分類による遺跡立地の検討
- 3 遺跡保存地区から出土した植物遺体の同定、花粉分析、植生調査などによる歴史景観の検討、復原
- 4 遺跡保存地区に分布する弥生時代から古墳時代の21棟の堅穴住居跡のうち代表的な5棟および古墳時代の河川跡を平面表示し、平面表示修景モデルの創出

を試みる。

具体的な計画・方法については後述するが、その前に平面表示する5棟の堅穴住居跡の特徴について概述する。

第7号堅穴住居跡

遺跡保存地区の南西部に位置する弥生時代中期の住居跡。平面形態は円形で、上面径約3.4m、床面積約35m²の規模をもつ。支柱は6本で、比較的壁面に近接して配置されている。炉跡は床面西部に偏在し、周壁に沿って壁溝が巡る。

第9号堅穴住居跡

遺跡保存地区の中央部からやや西に位置する弥生時代中期後半の住居跡。平面形態は楕円形状を呈する円形で、上面径約7.8～8.6m、床面積約48m²の規模をもつ。支柱は9本で、約2.3～3m間隔で、周壁に極めて近接して配置されている。また、中央穴を挟んで2ヶ所に支柱穴が認められる。壁溝はほぼ全周に巡る。西部では壁溝が途切れるとともに住居外への張り出しが存在し、出入口としての機能をもつ施設が想定される。

第13号堅穴住居跡

遺跡保存地区のほぼ中央部に位置する古墳時代前期の住居跡。平面形態は方形で、東西各辺約7.6m、南辺約7.1m、北辺約7.2m、床面積約54m²の規模をもつ。支柱は4本で、堅穴住居の平面形態と相似形をなして方形に配置される。屋内施設として周壁に沿ってベッド状遺構が巡るが、東・南各辺の中央部付近で途切れている。東辺部ではこの部分に周壁に接して、炭化物の充填した径約1.3mの平面形態円形の掘り込みが認められた。設置場所、性格、住居の時期などからカマドが出現する前段階の施設と考えられ興味深い。

また、この住居は火災住居で、床面上には桁および梁と考えられる12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出されている。その周辺には榿木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されている。さらに、方形に組ま

れた桁・梁の内部の床面には樺木に比べてひとまわり大きい炭化材が認められ、その規模、検出地点、桁との重複関係などから主柱の一部と考えられた。桁・梁の検出状況、住居の平面形態、主柱配置などから寄棟造屋根が想定され、堅穴住居の上屋構造を知る貴重な資料である。

第19号堅穴住居跡

遺跡保存地区の南端部に位置する弥生時代終末の小形の住居跡。平面形態は長方形で、東辺約4.8m、西辺約5.5m、南北各辺約3.5m、床面積約19m²の規模をもつ。主柱は2本で、屋内施設として東西両辺の中央部を除いてベッド状遺構が巡る。西辺部のベッド状遺構が途切れた床面には平面形態長方形の掘り込みが存在する。壁面は熱変していないが、内部には木炭が充填しており、炉跡に相当する施設と考えられる。この掘り込みに対峙する東辺中央部が出入口と想定される。

第20号堅穴住居跡

遺跡保存地区の南端部に位置する弥生時代中期前半の大形の住居跡。平面形態は楕円形で、上面径約6.8~7.8m、床面積約44m²の規模をもつ。主柱は壁面に沿って8本が配置されるが、さらにその内側には同心円状に5本の補助柱が存在する。壁溝は存在しない。南端部には幅約1.1m、長さ約20~35cmにわたって住居外に向かって階段状に高くなる張り出しが存在し、出入口としての機能が想定される。

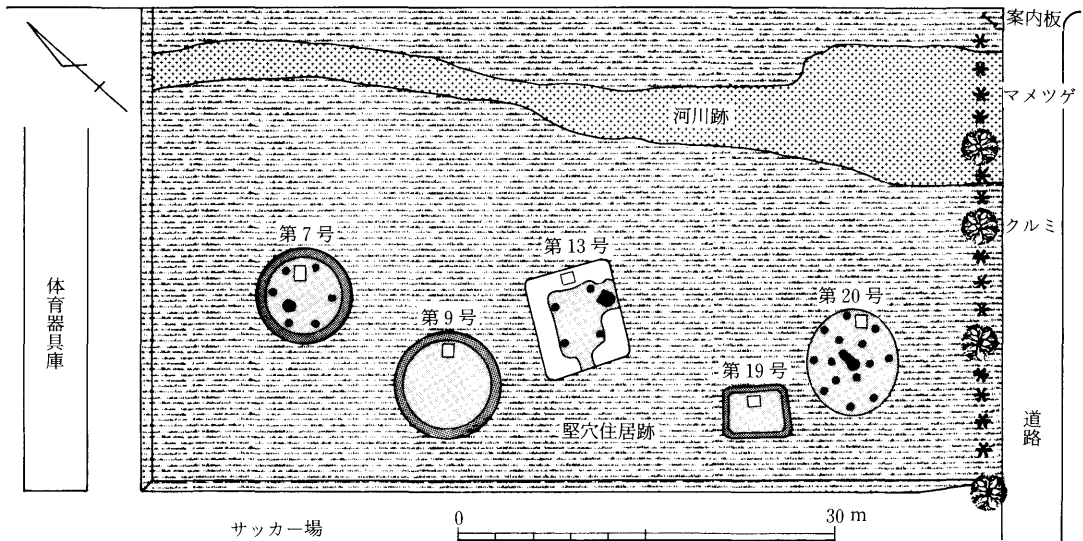


Fig. 94 吉田構内遺跡保存地区の整備試案

次に、具体的な整備案について述べることにする。

(1) 堅穴住居跡の修景表示

5棟の堅穴住居のうち第7・13・20号の各堅穴住居跡は、現地表面よりやや上位に平面復原する。若干の基礎工事を伴うが、遺跡保存地区の現地表面は覆土により遺構面から約45～50cm上位に位置し、整備に伴い遺構面を損傷しない範囲内での軽微な掘削は可能である。住居の平面形態、柱穴配置、炉跡・ベッド状遺構・壁溝などの屋内施設等はカラータイルを用い、色調の相違により平面表示し、床面構造を表現する。復原位置は、調査結果をもとに個別の遺構の検出された直上とし、各遺構には床面上にタイル転写により平易な文章で解説板を設置する。

また、第9・19号堅穴住居跡は、平面形態を表示することとし、現地表面にモザイクタイル等を用い表現する。

(2) 河川跡の修景表示

遺跡保存地区の東部を北西―南東に走行する古墳時代の河川跡を平面表示する。復原位置は堅穴住居同様、調査結果をもとに遺構の検出された直上とする。表現方法は流路内を若干掘削し、内部に石灰岩のクラッシャーを敷き詰めることによって、規模、河岸の状況、河川のイメージを表現する。

(3) 景観の修景表示

遺跡保存地区の南辺部には、周辺の調査で過去に出土したオニグルミの種子をモデルケースにして、寄贈を受けた現生種のクルミ3本がすでに植樹されており、往時のこの地の植生の一端が理解できる。南辺部は構内道路と境界を接しており、諸車の乗り入れが予想されるため、マメツゲを適切な配置で植樹することによってクルミとともに防護柵の機能をもたせる。遺構の修景表示されていない空間地は、張り芝によって散策、くつろぎの場とする。

(4) 全体の遺構配置説明

遺跡保存地区の遺構分布状況は、すでに東端部隈に概要の記述とともに平面図を掲載した総合案内板が設置しており、来訪者の理解を助けることができる。

以上述べたように、遺跡の歴史的理解の一助として、遺跡保存地区に分布する堅穴住居の構造、形式の時間的な変遷過程を可視的に表現し、積極的に保存、活用、公開することは、古代の物質・精神文化に対する人々の知的好奇心・欲求にこたえ、また、地域の特性を理解するだけにとどまらず、新たな地域創造につながる有効な手段となるであろう。

5 おわりに

山口大学構内遺跡の調査に鉞が入れられてから四半世紀が経過した。他の構内に比べて調査が進展している吉田構内では、縄文時代以降の集落の内容が次第に明らかになりつつあるが、残された問題点も多い。調査の主たる要因が施設整備に伴うもので、調査地域は必然的に校舎棟の存在する構内中央部に集中し、その周縁の地域では未調査地域も多い。特に、各時期の集落が占地したと考えられる構内東部、南部の洪積段丘上での調査が極めて不十分で、埋蔵文化財の分布状況はいまだ十分に把握できていない。関連遺物は出土しているが、縄文時代の集落、奈良～平安時代の国家機構と関連する行政施設、もしくはそれに係わる上級階層の居館など特定できておらず、今後の調査に帰するところが多い。また、構内の北方の丘陵上に存在が予想される弥生～古墳時代の埋葬跡の調査は手つかずで、その実態は全く知られていない。他の構内においても状況は同様で、今後面的な広がりをもった調査の進展が期待される。

[注]

- 1) 原則として各構内の調査成果は本書および下記の報告書によるが、平成3年度の調査成果は未発表で『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅺ』に掲載予定である。
 - a 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）。
 - b 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』（1982年）。
 - c 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』（1984年）。
 - d 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』（1985年）。
 - e 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』（1985年）。
 - f 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』（1986年）。
 - g 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』（1987年）。
 - h 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』（1988年）。
 - i 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』（1990年）。
 - j 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』（1991年）。
- 2)
 - a 山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査 山口』（1975年）。
 - b 山口県立博物館『山口県の地質』（1976年）。
- 3) 河野通弘・高橋英太郎「山口大学とその付近の第四紀層」（『山口大学教育学部研究論叢』第27巻第2号、山口大学教育学部、1977年）。
- 4) 以下、吉田構内での個別の施設等の位置関係は構内の配置図を参照されたい。
- 5) 山口市教育委員会「吉田遺跡」（『吉田遺跡・障子岳南（山水園）遺跡』（1991年）。
- 6) 山口市教育委員会『小路遺跡』（1988年）。
- 7) 山口市教育委員会『西遺跡Ⅱ』（1990年）。

注

- 8) 松尾征二「小路遺跡周辺の第四紀」(『小路遺跡』、山口市教育委員会、1988年)。
- 9) 青森県教育委員会『鶉窪遺跡』(1982年)。
- 10) 霧ヶ丘遺跡調査団『霧ヶ丘遺跡』(1973年)。
- 11) 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集』(1971年)。
- 12) 福岡県教育委員会『広田遺跡』(『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告II』(1982年))。
- 13) 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告5』(1984年)。
- 14) 調査者は報告書の中で、埋積土は「全体的に識別が困難なものが多く、単純な同一層と考えたほうが適当かもしれない」と指摘している。
福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』(1978年)。
- 15) 山口盆地内では、先に述べた遺跡に加え西遺跡および樺野川右岸の木崎遺跡などで縄文時代の遺構が検出されているが、いずれも晩期でそれ以前に遡る遺構の検出例はない。
 - a 山口市教育委員会『西遺跡』(1986年)。
 - b 山口県教育委員会「木崎遺跡」(『朝田墳墓群I・木崎遺跡』、1976年)。
- 16) 前掲注8)と同じ。
- 17) 前掲注5)と同じ。
- 18) 藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」(『考古学研究』第31巻第2号、考古学研究会、1984年)。
- 19) 前掲注15) a)と同じ。
- 20) 山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(1985年)。
- 21) 山口県教育委員会「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡II・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年)。
- 22) 須恵器の坏・高坏・提瓶・短頸壺・土師器の坏、耳環、鉄剣などが出土しており、人骨も残存しているという。出土遺物は山口県立博物館に収蔵されている。
 - a 山口市平川公民館『平川郷土の歩み』(1961年)。
 - b 石川卓美『平川文化散歩』(山口市平川公民館、1972年)。
 - c 山口県教育財団『山口県内出土考古資料目録』(1979年)。
- 23) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
- 24) 山口県教育委員会『下右田遺跡第4次概報・総括』(1980年)。
- 25) 山口県教育委員会「玉祖遺跡」(『玉祖遺跡・西小路遺跡』、1983年)。
- 26) a 前掲注2) a)と同じ。
b 山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査 宇部東部』(1972年)。
- 27) 山口県教育委員会『山口県遺跡地図第1次改訂版』(1991年)。
- 28) 河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙「本州西端部海岸の洪積層とその問題」(『山口大学教育学部研究論叢』第14巻第2号、山口大学教育学部、1965年)。
- 29) 山口県旧石器文化研究会によって表採・発掘資料が報告されている。

山口大学構内の埋蔵文化財の分布

- a 山口県旧石器文化研究会『長樹遺跡発掘調査概報』（1985年）。
- b 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（1）～（14）」（『古代文化』第35～43巻、1983～1991年）。
- 30) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（6）」（『古代文化』第39巻第1号、1987年）。
- 31) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（10）」（『古代文化』第41巻第6号、1989年）。
- 32) ナイフ形石器、削器、剝片尖頭器、細石刃、押形文土器などが採集されている。
 - a 宇部市教育委員会『宇部の遺跡』（1968年）。
 - b 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（8）」（『古代文化』第41巻第1号、1989年）。
 - c 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡（9）」（『古代文化』第41巻第3号、1989年）。
- 33) 前掲注2) に同じ。
- 34) 山口市教育委員会「茶白山石棺群」（『茶白山石棺群・大判石棺調査報告書』、1978年）。
- 35) 山口県教育委員会「鴻ノ峰1号墳」（『朝田墳墓群II・鴻ノ峰1号墳』、1973年）。
- 36) 山口県教育委員会『白石古墳群』（1980年）。
- 37) 山口市教育委員会『大内氏館跡VIII』（1987年）。
- 38) 浜田清吉『山口市後河原の遺物発見地』（山口大学教育学部、1953年）。
- 39) 山口県教育委員会『桜畠遺跡』（1991年）。
- 40) 前掲注27) に同じ。
- 41) 山口県企画部企画開発課『土地分類基本調査 徳山・光』（1978年）。
- 42) 福本幸夫「御手洗遺跡」（『先原始時代の光市』、1966年）。
- 43) 小川国治「近世のひかり」（『光市史』、1975年）。
- 44) 宇部市教育委員会「月崎遺跡」（『宇部の遺跡』、1968年）。
- 45) 山口県教育委員会「美濃ヶ浜遺跡」（『山口県文化財概要第四集』、1961年）。



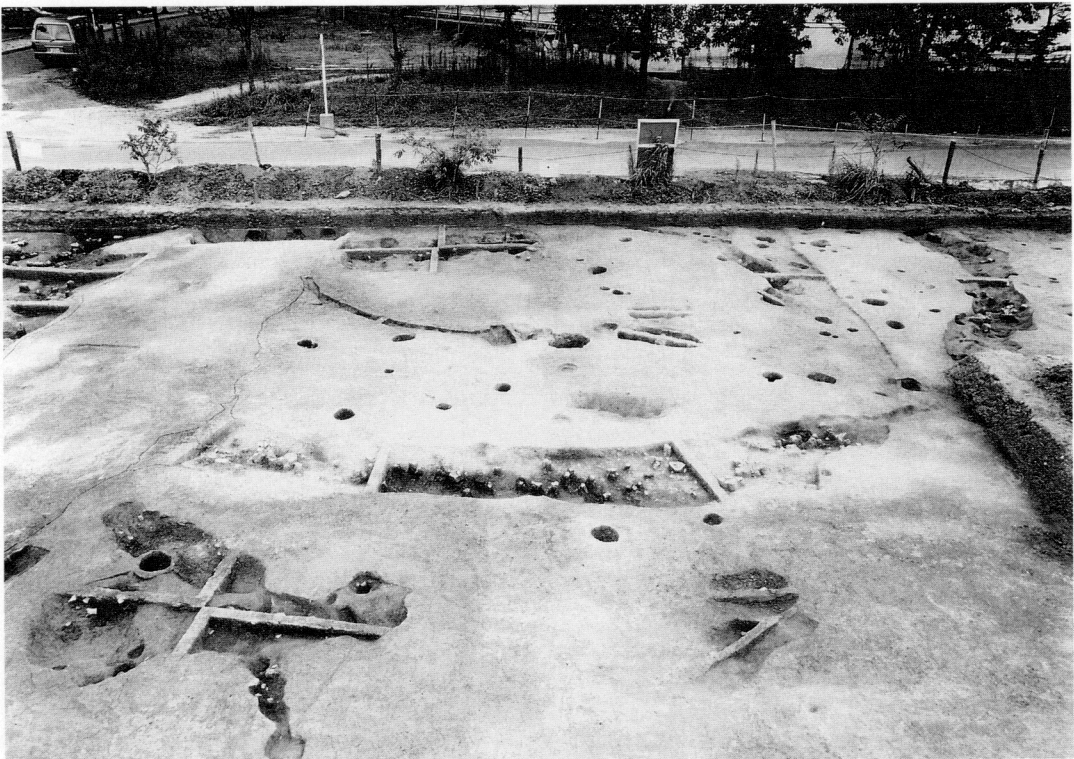
(1) 吉田構内教養部複合棟敷地落とし穴（西から）



(2) 吉田構内教養部複合棟敷地縄文土器出土状況（東から）



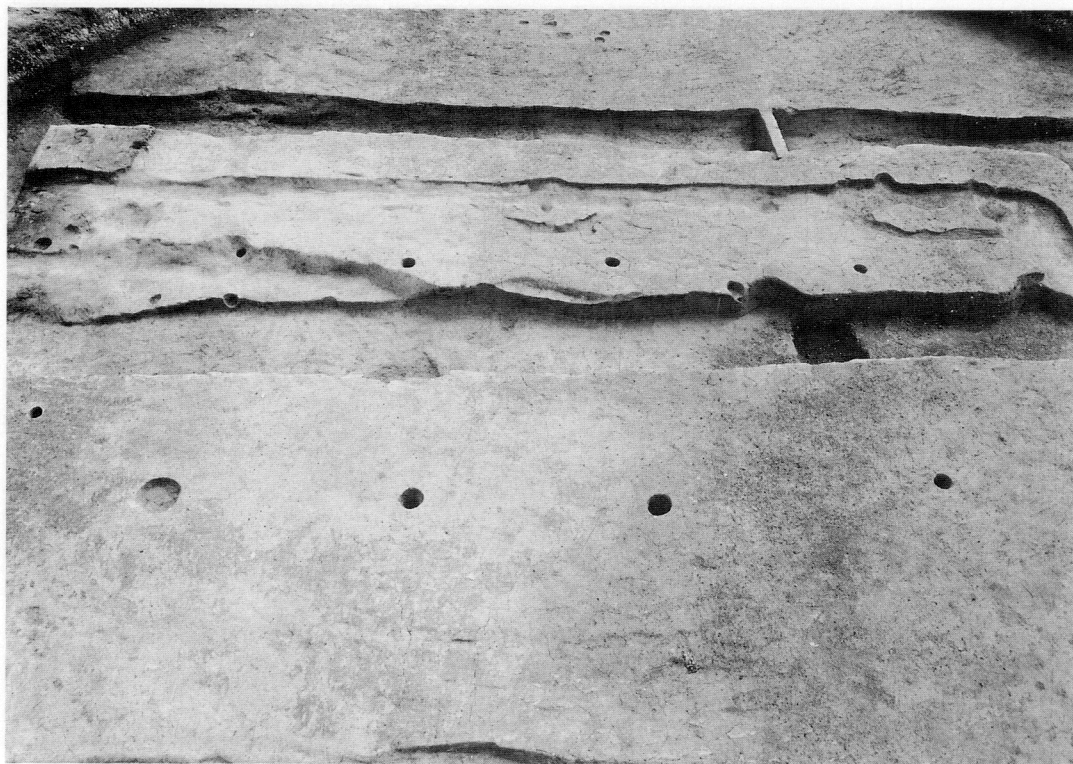
(1) 吉田構内遺跡保存地区第9号堅穴住居跡（弥生時代中期後半）（東から）



(2) 吉田構内遺跡保存地区第21号堅穴住居跡と環濠（弥生時代中期後半）（北西から）



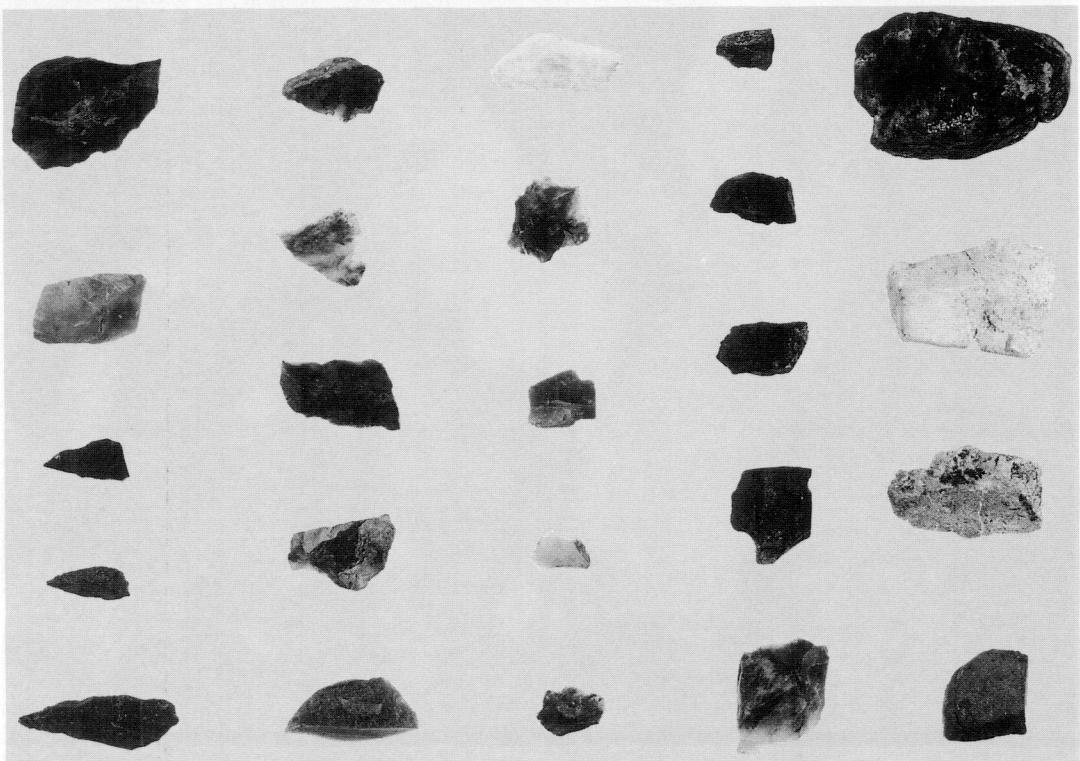
(1) 吉田構内遺跡保存地区第13号竪穴住居跡（弥生時代終末）（北西から）



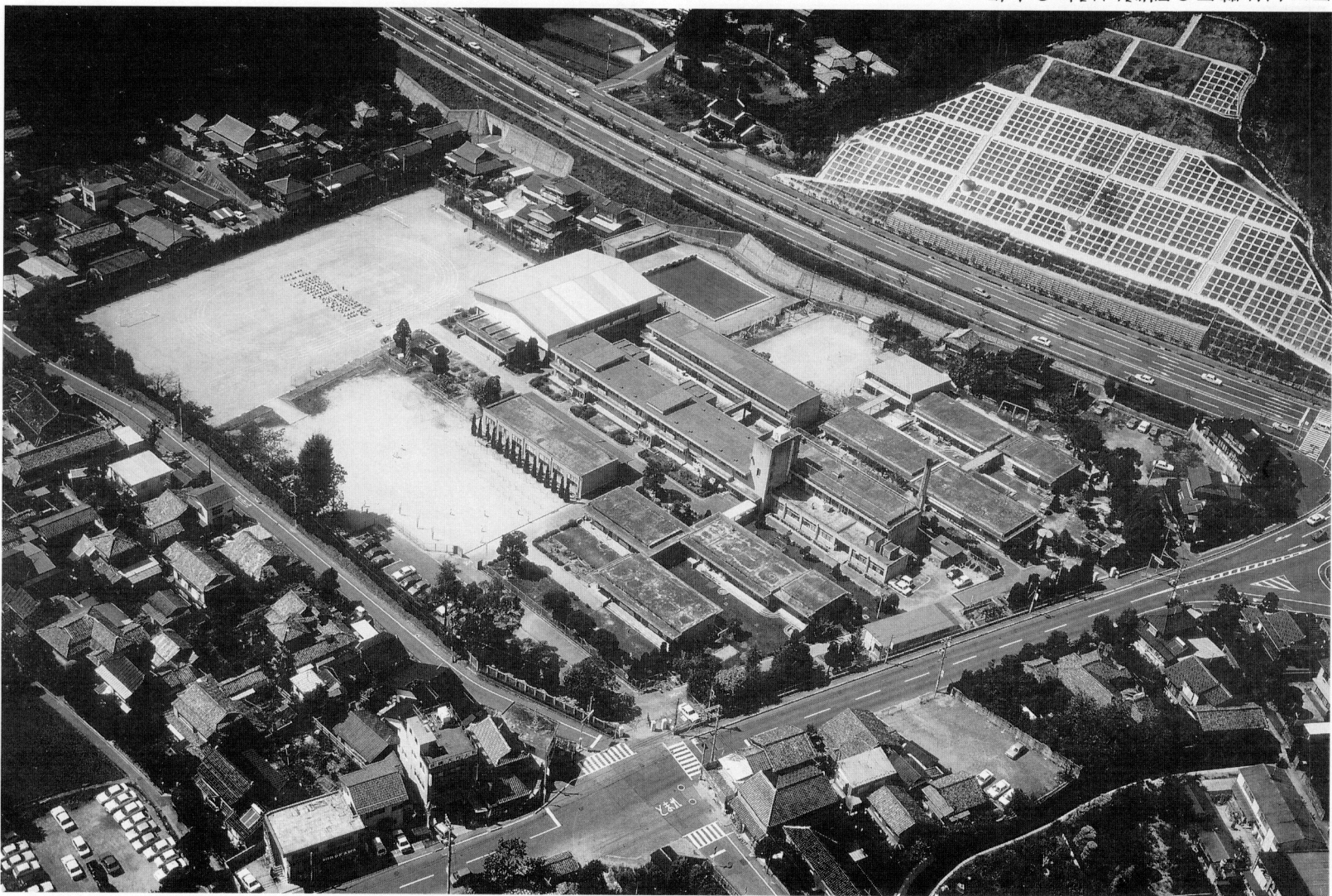
(2) 吉田構内教養部複合棟敷地掘立柱建物跡（江戸時代）（北から）



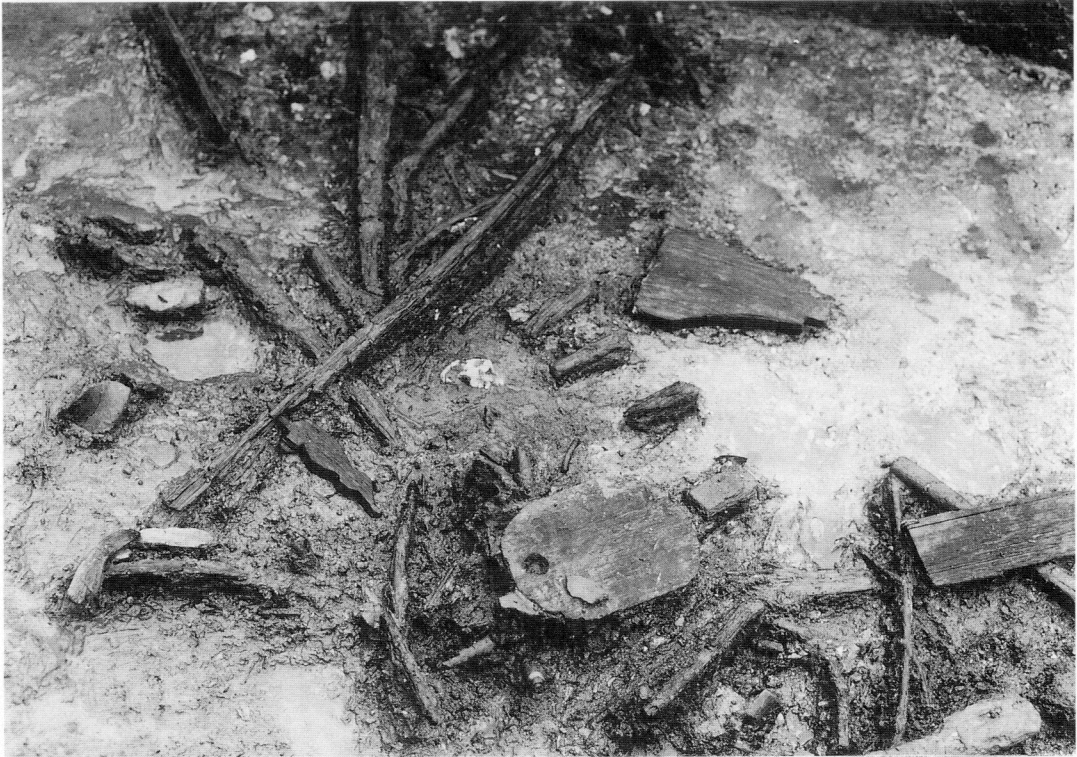
(1) 吉田構内教養部複合棟敷地井戸（江戸時代）（東から）



(2) 小串構内病棟敷地出土石器



亀山構内（教育学部附属幼稚園・同山口小学校）全景（東から）



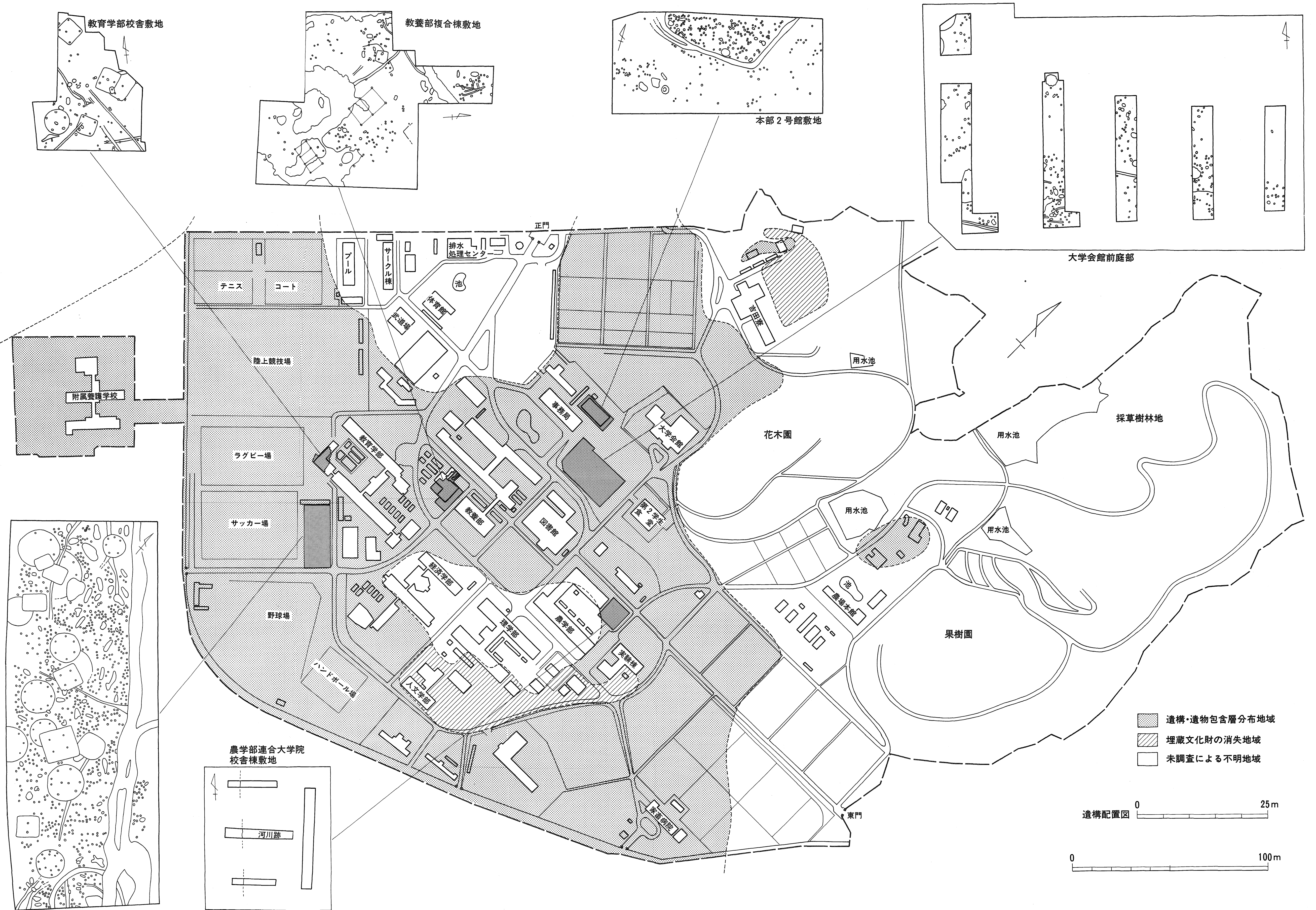
(1) 亀山構内教育学部附属山口小学校敷地溝状遺構木器出土状況（南から）



(2) 亀山構内教育学部附属山口小学校敷地竪穴住居跡（東から）



光構内遠景（東から）



付図1 吉田構内の埋蔵文化財分布図